

## 「その場限り」に潜む希望

——津村記久子「サイガサマのウィッカーマン」論——

泉谷 瞬

はじめに

津村記久子「サイガサマのウィッカーマン」<sup>①</sup>は、大阪府南部の架空の町で住民たちから信仰を受ける「サイガサマ」の祭りをめぐる物語である。津村の作品はデビュー作よりリアリズムの傾向が強く、現実世界でも再現可能なレベルでの日常性が多く語られてきた。しかし本作は、リアリズムに基づく日常が描かれる中で、そうした世界観では捉えきれない奇妙な現象がいくつか提示される点に一つの特徴がある<sup>②</sup>。

作中の「サイガサマ」とは、前近代における世界各地の宗教的儀礼に見られるような「人身御供」に関わる神として設定されているのだが、その描写には威厳が無く、むしろ人体の一部を糧にしなければ力を発揮できない程の弱い神——「できない子」として扱わ

れている<sup>③</sup>。こうした神にまつわる「無力」の感覚が、主要登場人物であるシゲルと繋がっていく過程を追うのが物語の本筋である。

単行本刊行時の書評では、「神社や祈りと、若者を融合させた珍しい小説」として、「家族に問題を抱えているといっても、彼らに特に深い苦勞があるわけではなく、恋に悩むことはあっても重い失恋をしたわけではない。だがそれでもなにかに頼ろうとするのは、彼らが暗中模索の青春期にいるからだろう」<sup>④</sup>と、本作を解釈する向きも存在する。だが本論の関心は、こうした「青春小説」の枠組みによつて登場人物の抱える状況の軽減を図ることではなく、超現実的な題材が挿入されることによつて、作品がいかなる達成を行ったかを見極めるところにある。

以下、本論では現代日本社会において隆盛を見せるスピリチュアリティ概念と対比させながら、「家族」に代表される既存の親密性とは異なる関係性を見出す試みとして「サイガサマのウィッカーマ

ン」の読解を進めたい<sup>5)</sup>。また、本作には東日本大震災<sup>6)</sup>以後の刻印が僅かに含まれており、そうした同時代状況において、この物語が示す可能性についても触れていく。

## 一、現代日本社会におけるスピリチュアリティ概念

本作の詳細な分析へ入る前に、前提となる現代日本社会におけるスピリチュアリティ概念の定義について、二〇〇〇年代以降の先行研究を参照することで簡潔に示したい。樫尾直樹は、既存の制度的な宗教集団に対する評価も含めた価値相対主義が広まる状況において、現在、多くの人々がスピリチュアリティ概念に魅力を感じる要因を次のようにまとめている。

不可視で操作することのできない自分の生（人生、いのち）の意味は、自己を超えた超越的な次元との関わりの中でしか捕捉することができない。（略）／自己実現と絆、そして、人生の意味。現代人は、そうした切実な思いを抱き、幸せを求めて、「スピリチュアリティ」に接近しようとしている。こうした精神的状況の中で、「スピリチュアリティ」の全域化の過程は、徐々に進行しているのである。<sup>6)</sup>

また、六〇年代以降、世界的に波及した「ニューエイジ」や「精神世界」に基づいたスピリチュアリティな実践を概括し、それらに「新霊性運動・新霊性文化」という名称を付けたことでも知られる島蘭進は、その現代的な意義を、次のように示している。

（略）新霊性文化は自己変容の体験を通して、諸個人に強力なアイデンティティ形成の機会を提供する。そこで形成されるアイデンティティは特定の民族や国家への所属に関わりなく、地球上のすべての個人に開かれているという意味で、普遍主義的な性格をもっている。／これまで、そのような普遍主義的アイデンティティを地球上の諸個人に提供する文化的資源として有力だったのは、救済宗教と近代の世俗的ヒューマニズムである。（略）／一方、近代の世界では、国民国家の諸機構、すなわち政党や行政機構や労働組合やマスコミや病院、とりわけ学校を通して、合理主義的な世界像と結びついた世俗的ヒューマニズムの価値が鼓吹された。「自由・平等・博愛」はこの価値体系を代表する言葉である。（略）／新霊性文化はこの二つの普遍主義によるアイデンティティ形成に対して、オルナタティブを提示しようとしている。<sup>7)</sup>

このようにグローバルな広がりを見せつつあるスピリチュアリティな言説・文化の総体は、単なる一過性、一地域的な現象ではなく、現代社会の趨勢を検討する上で看過できない概念として成熟しつつあることが窺えよう。しかし、そうした現象を、既存の宗教や近代的科学主義・合理主義を超越するものとして即座に肯定する行為にも危うさが伴うことは確認しておくべきだろう。桜井義秀は、グローバルな商品経済が進行することによる産業の空洞化および格差と貧困が可視化された日本の現状を指摘した後に、「こうした状況を背景に広がるセラピー社会とは、社会政策をミニマムにして自

己決定・自己責任の倫理と負担をシステム化したアメリカ特有の仕組みであり、新自由主義に根ざしたポジティブ・シンキングや、落ち込んだときのカウンセリングやセラピーまでも市場によって供給しようとする」<sup>5)</sup>と警告を発している。

こうした批判的観点は、現代文学におけるスピリチュアルな表象を問い直す際にも有用なものとなる。リゼット・ゲーパルトは、八〇年代以降の日本文学が見せるスピリチュアリティの傾向として、「かつては登場人物の愛の体験に定位されていた「全体性の体験」が、今ではしばしば、宗教経験を描くか、あるいはセクシユアルなものとの宗教的なものと結びつけるような、エクスタティックな場面において表現されている」<sup>6)</sup>と述べているが、新自由主義が加速する二〇〇〇年代以降の時代状況との比較は、親密性とスピリチュアルな文学表象の関連性を示唆するこうした研究成果を更新する可能性を持つだろう。

ここで再び、本論で分析対象とする津村記久子「サイガサマのウィツカーマン」に焦点を戻すならば、「おもに個々人の体験に焦点をおき、当事者が何らかの手の届かない不可知、不可視の存在（たとえば大自然、宇宙、内なる神／自己意識、特別な人間など）と神秘的なつながりを得て、非日常的な体験をしたり、自己が高められるという感覚をもったりすること」<sup>7)</sup>という定義を踏まえることで、本作をスピリチュアリティ概念と対比させて考察する一定の妥当性を確保したい。その上で、本作におけるスピリチュアルな表象が、「他者」と共同性」という本特集が立てるテーマのもと、どのように解釈可能であるのか——スピリチュアリティ概念が新自由主義の燃料としても活用されかねない現況に対して、どのような回避の方法が

あり得るか。もしくは、共同体、ジェンダー、身体の異なるありようを、いかにして紡ぎ出すかといった点を中心に、次章から作品内容の検討を始めたい<sup>8)</sup>。

## 二、「弱さ」を知っていくとどうなるか

本作で主人公と目される男子高校生のシゲルは、苛立つことが多い人物として物語の開始時点から描写されている。この苛立ちの感情については、池田雄一が「自分の人生から選択肢を奪うような状況、つまり「物事に関する原則への意識に欠ける」状況に苛立つている」<sup>9)</sup>と指摘するが、本論ではさらに、その苛立ちの矛先となる具体的な対象を見ていきたい。最初にシゲルの怒りがぶつけられる相手は母親である。

シゲルの母親は、とにかく物事に関する原則への意識に欠ける女だった。だからパートも長続きしないだろう。／「あかさあ、今朝洗濯物干してたら、ハンガーで手をちよつと切っちゃって」／「知るか」（二二頁）

／「お母さんが、家ちよつと空けるねつて言つたらどう思う？」  
／「知らんよ」（八八頁）

ここで注目できる言動は、シゲルの「知らん」という言葉だ。彼は母親がどれだけ熱心に話しかけてきたとしても、無関心を表すその一言で対話を遮断しようとする。こうした傾向は家族にだけ

向けられるものではない。母親への怒りを放つた直後、シゲルは隣に住む井口さんの動作について、あえて「のろのろ」や「よちよち」といった否定的な擬態語を伴う身体性を強調することで、「そんなまったく関係のないことにすら腹が立つ」と、他者に対する怒りを過剰に表明していく。シゲルは次々と、目の前にある対象に怒りの所在を見出すのだが、しかしその対象に関して、彼は具体的に何も「知らない」し、それは彼と「まったく関係のないこと」なのである。

やがてシゲルは公民館でのアルバイトを続けるうちに、様々な年齢層の女性たちと具体的に関わるようになっていく。元同級生のセキツ力はもちろんのこと、母親、井口さん、ヤシロ、サキコさん、父親の不倫相手と思われる女性などであるが、その中ではたとえば母親や、まだ正体を知らなかった頃の井口さんに対する怒りの感覚が、物語が進むにつれて薄れてくることが了解できる。

中盤以降、「わたしが誰かわかる？」と井口さんに直接問われたシゲルは、年老いたその外見だけで、井口さんと、以前の「隣の家の奥さん」が別人であると自然に判断してしまっていたことに気付く。その後、自動車事故に遭遇した際、奇跡的に家族全員が無事であったこととまるで引き換えであるかのように、井口さんの外見が急速に老化したという現象が本人より説明される。この現象は、サイガサマの力を示す一つの事例として作中に記されたものだろう。そうした話を聞いて、シゲルは井口さんを一人の他者としてようやく具体的に把握し始めるのである。次に引用するように、結末の部分ではシゲルの他者を見つめる目は、劇的な変化を遂げている。

行つてらっしゃい、という声が聞こえたのでそちらを見ると、白髪の井口さんが、しつかり背筋を伸ばして中学生に向かって手を振っている。(一五八頁)

このように、様々な登場人物たちが身体の一部を失う、あるいは身体の様相が変化するという出来事に見舞われつつも、その事実を受け入れていく一方で、極めて対比的に描写される人物がいる。それは、若さにこだわらざるシゲルの父親である。シゲルは父親について、「いわゆる凡百のおっさんたることを否定し、ときどき趣味のエレキギターを弾き、身づくろいに気を遣い、極力やる気のなさそうな小さい声で喋る」、「若さをドーピングしたような気持ちになって、自分をごまかしている」、「みづともない」人間であると冷酷な評価を下している。これを父親に対する理由なき反抗期と読むべきではない。シゲルが父親を嫌悪する理由は、おそらく次の一文に表れているからだ。

最近いやに若さを取り戻したがっている父、髪を明るくして、ジムに通って、バンドの真似事をして、不倫をして、自分が老いてゆくことに抵抗している父親からしたら、学校に行かずに家にこもって、体の内部の模型ばかりを作っている息子など、はずれもいいところであるに違いない。(八六―八七頁)

本作においてシゲルの父親は、身体の若さ・強さ・格好良さにこだわること、「老い」に代表される身体の弱体化へ抗おうとする人物の代表格として設定されているのである。そしてこれとは逆に、

同じ男性でも身体に対する認識が異なる人物が作中には登場している。

シゲルが小学校に通っていた頃の高江垣先生は、若い俳優がよくやっているような、ワックスで頭部を複雑にプロッキングしたかっこいい髪型だったが、新聞記事に載っている高江垣先生の頭は、完全につるつるになっていた。(略)／おしやれか？ これ？

とシゲルは首を捻る。似合ってるし、おしやれでないこともないだろうけれども、あの先生ならもつと通りのいいおしやれがあるだろう(略、二九頁)

父親と高江垣先生の二人とも、元々の顔の造作は格好良いという共通点は認められるが、シゲルいわく「若さのドーピング」をする父親と、高江垣先生の存在はまるで対極的である。ちなみに、高江垣先生が髪型を変更した理由は明確に説明されない。しかし実は高江垣先生の場合も、窮地に陥りつつも何とか助かった過去の出来事の後、井口さんの時と同じく、その代償であるかのように髪の状態が変わったという暗示が物語には埋め込まれている。これら井口さんや高江垣先生の振る舞いから推測できることは、雑賀町で超越的な体験をした人は、それをサイガサマによるものとして自らの状況へ受け入れる傾向にあるということである。その傾向は、サイガサマの祭りに熱心な姿勢で協賛を続ける会社の社長にまつわる逸話が挿入されることで、決定付けられる。

黒い眼帯をした初老の丹沢社長は、管理テントの手前の机でお

茶を飲んでいる。(略)／数年前の、非常に乾燥した気候だった春に、丹沢流通の古い倉庫に火がついて、中の商品が燃えてしまった。(略)そんな時に、夏の宝くじが当たったのだった。賞金は一億だった。それと同時に、丹沢社長は右目を失った。／家の階段で転んだらごろつと出て、戻らなくなった、と丹沢社長はいつも説明するという。朝起きたら枕に出ていた、というように言う時もある。どちらにしろ、病院には行っておらず、丹沢社長は、肅々と右目を失ったことを受け入れた。(一四三頁)

本作におけるサイガサマという神は、願いを叶える相手の身体の一部を奪っていくということで、人間をその分だけ身体的に「弱く」させる(ただし、どの部分を取られたくないか、願いをする人間はあらかじめ「申告物」を制作することで、ある程度回避が可能ということになっている)。身体の一部を奪われ、「弱く」なった人々が、しかしそうした事態を肅々と受け止める姿は、自分の周囲に存在する他者について何も知らずとしなかつたシゲルの視線を少しずつ変化させていく。すなわち、人々の具体的な「弱いありさま」をシゲルが知っていく、それによって苛立ちが解消されていくという流れが、本作の基礎的なプロットとして設計されているのである。

### 三、「無力」を核とするスピリチュアルな共同体との対比

前章では、サイガサマによって身体の一部を奪われた人々の状態を確認した。さらに本作で特筆すべき点は、次のように、超越的

な存在として人々より認識されているサイガサマ自体が、神様としては「弱い」存在であるということだ。

サイガサマが、諸願成就と交換に、人間の体の一部を持つていくという行為は、たましいを売らせるという悪魔的な契約とは異なる。サイガサマは、神様の中ではとても力が弱く、そうやってもらいものをしないと、力が発揮できないからなのだった。

(二四―二五頁)

別の場面では、サイガサマを祀る神社の宮司であるヤシロですら、「できない子」と呼んでいることから、サイガサマに対するこうした評価は半ば公然のものになっていると推定できる。本作を分析するにあたって、人間と神、両方に共通するこの「弱さ」、あるいは「無力」な様相は、重要な鍵となるのではないだろうか。

作者の津村記久子は、宮部みゆきとの対談の際、宮部から「他者に向けられる暴力というものを一貫したテーマ」として持つていくと指摘されている。それに対して津村は、「大きくて残酷なものに、正気を保ったままどう抗って生きていったらいいんだ? ということ」、あるいは「力」対「弱い者」<sup>(3)</sup>、「力のない者がどういうふうな力と渡り合って生きていくのか」という主題を継続させる意思を見せている。また、本作刊行時に行われた千早茜との対談では、物語の設定に関して次のようにも述べている。

**津村** 結局、世の中ままならんことがだんだんわかってくるんですよ。歳取ったら、もう手放すしかないっていうことが増え

てきて。(略) 何て言ったらいいのかな、自分の力ではどうにもならんものがどうか幸せになってくれとだけをお願い、みたいな姿を書きたい、と思つて。何らかのかたちで関わりたいんですよね、やつぱり。そこで行き着いたのが、サイガサマというか。物事は自分の関係ないところで起こるけれども、実はそれも自分のせいなんじゃないかという妄想が起こる。よく考えればそんなの絶対ありえんことやのに。<sup>(4)</sup>

以上のように、デビュー時から津村の作品に一貫する主題として、強大な暴力性と、その対象となる「弱い者」という二者の関係性がある。こうした関係性において、津村の作品では弱者の側がより強い力を身に付けて打ち勝つていくといった展開を見せることはない。先の対談でも発言があつたように、むしろその「ままならなさ」を所与の状態とした上で、どのように現実と渡り合っていくかという点にこそ、津村作品の特徴はある。

このテーマを見据えるために本論では、二〇〇〇年代以降、「弱さ」という概念を肯定的に再解釈する言論が、複数の知識人・文化人たちから提示されている同時代状況と比較を行っていく。たとえば高橋源一郎と辻信一の間で行われた次の対談を参照したい。

**辻** (略) さて最後に、「勝たない・負けない」の知恵ですが、それは要するに、「勝ち・負け」という二元論から自由である、ということだと思ふんです。同じように、「弱さ」と「強さ」という二元論からこそ、まずは抜けださなければならぬ、そういう土俵から降りなければならぬというのが、弱さの思想

の入口だと思ふ。そもそも強さ・弱さで相対的な概念ですもんね。(略 弱さの思想とは、その「強さ・弱さ」の二元論そのものを超えていくことですよね。(略) 社会について言えることはそのまま自分にも言えるわけで、まずは内なる二元論やヒエラルキーからいかに自らを解き放つか、です。<sup>(15)</sup>

自らの内なるヒエラルキーを解放する、という表現には、個人的な内面の探求と超克を目的とするスピリチュアルな実践との親和性を見ることもできよう。あるいは、鷲田清一は次のように提言している。

強いものに従うということ、それは「必然」のことである。そうしかしようがないという意味で、そこに「自由」という余地はない。そうだとすると、それを裏返して、弱いものに従うということ、そこに「自由」がある、と言えないか。<sup>(16)</sup>

これらの主張では、「弱さ」という概念に現代社会の限界を乗り越える示唆が含まれているといった、いわば逆転の発想が語られている。「強さ／弱さ」の二元論に隠れた単純性を批判するための認識を構築することの重要性は、本論でも共有するものである。

しかし、高橋と辻の対談では、「強さ／弱さ」が「相対的な概念」と強調されていたことには幾分の注意を促したい。社会的・政治的な状況によって、「強さ／弱さ」が左右されるという原理はその通りであるとしても、具体的な境遇として「弱者」の立場を引き受け、被害に直面している人々にとって、そうした「相対化」の発想

はどれ程の有効性を持つのだろうか。これに関する具体例として、イギリスの社会を挙げてみよう。オーウェン・ジョーンズは、イギリスにおいて貧困層を指示する「チャヴ」という言葉を表題に置いた著書にて、次のような分析を見せる。

最下層の人々を劣等視することは、いつの時代でも、不平等社会を正当化する便利な手段だった。(略)／こうした劣等視には、たんなる不平等以上の問題がある。その根本にあるのは、イギリスの階級闘争の名残だ。一九七九年、首相に就任したマーガレット・サッチャーは、労働者階級への総攻撃を開始した。これによって、労働組合や公営住宅などの制度は廃止され、製造業から鉱業に至る数々の産業が破壊された。回復できないほどバラバラになったコミュニティもあった。連帯感や共通の向上心といった価値も一掃され、そこには厳しい個人主義が居座った。(略)／貧困や失業といった社会問題は、かつては資本主義の欠陥から生じた不正であり、少なくともなんらかの対処が必要と考えられていたが、今日では個人の行動や欠陥、選択の結果だと理解されるようになった。<sup>(17)</sup>

「弱者を敵視する社会」という副題が示すように、実態的な状況として「弱者」に明確な敵意が向けられ、そして、自己責任・自助努力の論理によってその眼差しが正当化されるような時、「強さ／弱さ」の二元論からの脱却という認識的な次元における解放のみを重視する行為は、社会的な非対称性が生み出される構造に対する批判的な視座をかえって失う側面も持っているのではないだ

ろうか。もしくは、「強さ／弱さ」を相対化する戦略自体が、新自由主義の素材として逆用される恐れもここでは検討しておくべきだろう。

現在のスピリチュアリティ文化は、ニューエイジとその周辺のみならず、教育、医療・社会福祉、健康、大衆文化の分野にも拡散してきていることもその特徴として挙げられる。(略)人氣グルーブSMAPによる「世界に一つだけの花」の歌詞にある「ナンバーワンにならなくてもいい、もともと特別なナンバーワン」というメッセージは、ありのままの自己受容、他者との

(18) 競合から協同への転換を掲げるものとして把握できるだろう。

二〇〇三年に発売されたSMAPの楽曲「世界に一つだけの花」は、スピリチュアリティと新自由主義の論理が並存する好例として取り上げることが可能である。(19)「世界に一つだけの花」が打ち出している「ナンバーワン」というメッセージは、「個人の尊重」と容易に結び付くがゆえに、誰にも否定しがたい「正しき」を持つ。「ナンバーワンでなくてもいい」ことから導き出される「ナンバーワン」の称揚によって、「弱さ」や「弱者」の概念は、理想化される可能性を常に含んでいる。だが、稲垣栄洋は「ナンバーワン」の発想にまつわるこうした誤解を指して、次のように述べている。

ナンバーワンというのは個性のことではない。その個性を最大

限に活かしてナンバーワンになることのできる「ポジション」のことなのである。もつともSMAPが歌う「世界に一つだけの花」は、「花屋の店先に並んだいろんな花」である。人間が世話をしてくれる花屋の花であるなら、ナンバーワンでなくとも、ナンバーワンであればそれでいい。／しかし、自然界であれば、ナンバーワンになれる場所を見出さなければ生存することはできない。ナンバーワンとは、自分が見出した自分のポジションのことなのである。／(略)「ずらす」ということは、他の生物がナンバーワンになれない場所を探し、自らがナンバーワンになる自分の居場所を「探す」ことである。そしてどんなに小さい場所であっても、ナンバーワンになる秀でた能力を持たなければならぬのである。(20)

すなわち、「ナンバーワン」とは、元々その個体の性質を意味するものではなく、あくまでもポジション取りの結果として導き出される状況を表す言葉に過ぎない。換言するならば、「ナンバーワン」な存在といえども、自らの真価が発揮できる場を探し出せるだけのフレキシビリティは最低限、必要とされていると言えよう。そうしたフレキシビリティとは、もちろん新自由主義の論理が要求するものでもある。このように考えていくと、「弱さ」の概念に、あらゆる可能性を託すことへの懸念はやはり捨てるべきではないだろう。

それでは、こうした同時代における「弱さ」の概念と並べる形で、津村記久子の文章を検討することで何が見えてくるだろうか。次の引用は、経済的に困窮した家庭に所属する子供の貧困連鎖に関する調査に寄せられた、津村の解説である。



意欲や能力があっても、あらかじめ上に行けないと決まっている社会は、人間の力を奪う。日本の社会は、子どもへの投資を避けることによって、自分自身の首を緩やかに締められているかもしれない。<sup>(21)</sup>

ここでは明らかに社会制度の改良・更新が想定されており、子供たちが現在引き受けている「弱さ」を、フレキシブルな発想のもとで逆転していくべきであるといった主張は窺えない。本論では、「ままならなさ」を所与のものとするところこそが津村作品の特徴であると分析してきたが、作者の発言を引き合いに出すならば、そこにはずれが見出される。しかしこのずれを、本論では矛盾する事態とは捉えない。

現実に存在する社会的弱者への支援の必要性は、基本的な前提として当然打ち出されるべきだろう。だが、それにもかかわらず制度や支援の網の目から零れ落ちるもの、システムでは掬い取りようのないものは出現せざるを得ない。そうした「ままならなさ」をこそ、どのように我がものにしていくか。場合によっては、その「ままならなさ」をマゾヒスティックな快楽としてどのように置換していくか——文学の表象とは人間が落とし込まれた具体的な状況の、最終的な解釈の場として機能する面を持つ。このような社会的包摂と、そこから逸れていく状況を運び取る文学表象の、いわば「二段構え」のようなスタイルを、津村の作品は体現しているのではないだろうか。つまり、津村の作品には、社会的な非対称性、システムの不備を改めていくための怒りが含まれていることはもちろん、

それと同時に、社会的な改良によっても完全には掬い取れない個別の感情が描かれている。この個別性を詳細に分析していくことで、人々の生活が新自由主義的体制に略取される危険を回避できる可能性が見えてくるだろう。そして、本作におけるスピリチュアルな題材とは、まさにその可能性に貢献する要素として活用されているのである。

たとえば医療の現場におけるスピリチュアルなケアとは、「マニユアル化できるようなものではなく」、「その場その場で生成」<sup>(22)</sup>されるものとして認識されることがある。津村の作品に登場する人々の「その場限り」の繋がりも決して軽視できるものではなく、そこには偶然性の高い出来事の積み重ねが状況を好転させていくといった特徴を指摘できるだろう。<sup>(23)</sup> こうした物語の働きは、本作にも共通している。以下、特に重要だと見られる二つの場面を参照したい。

「ごめん、間に合ってるよな？ 危なかった。もう、ほんとにこっちもどきどきして死ぬかと思つたわ、心臓止まって生まれてくるとか！」／（略）「申告物入れてくれた？」／「あ、はい、入れました」（略）／「何時ぐらいに入れた？」／「ええと、たぶん、八時半ぐらいです」／ヤシロさんは、腕時計を見ながら、そうか、そうか、ありがどう、と何度かうなずいて、あわただしく去っていった。（一四九頁）

物語の終盤、ヤシロの友人ヤワタサキコの出産とサイガサマの祭りにはちょうど重なってしまう。出産の応援に向かうヤシロから、シゲルは申告物を代わりに放り込むよう頼まれていた。引用の会話

から察するに、サキコの子供は危険な状態で生まれてきたものの、何とか一命をとりとめたことが分かる。そしてそれは、ヤシロの願いやサキコの子供の命を救うことを、サイガサマが叶えたとも解釈できるように記述されている。この箇所では注意すべきなのは、シゲルの存在である。シゲルは、ヤシロの申告物を代理で入れたということで、間接的な形でサキコの出産に介入している。シゲル本人がほとんど意図していないこの動作こそが、結果的に周囲の人間の助けとなつているという構図が示されているのである。

さらに次の引用は、セキツカの父親が倒れ、そのことによつて困窮する経済状況の話を受け取った後、シゲルに訪れた感情が描かれる場面である。

シゲルは、セキツカのぼつぼつとした話をじつと聞きながら、何もできない、ということを思った。自分には何も、セキツカに与えられるものがない、と思った。そのことに、むなしくなるのでもなく、辛くなるのでもなく、ただ強く傷付いた。自分はこの様な気持ちになることがあるのか、と不思議にも思った。(一三三頁)

確かにシゲルが、セキツカに対して直接的にできることはこの時、何もないと言つてよい。それでもサキコの出産を意図せず助けたように、シゲルが自分のことを、「無力」、であると思つて、妻は彼は「無力」、ではない。しかし、もしも自分が誰かに何かを与え得るような存在であると認識するのであれば、そこから支配や上下関係が生み出される恐れはつきまとう。それゆえ逆説的ではあるが、シ

ゲルがここで「無力」であると痛烈に自覚することには、大きな意義が込められているのである。

このような分析を行つてきた際に判明することは、津村の作品では、「無力」や「弱さ」の概念が、何らかの共同体を直接的に構築する論理としては描かれていないという点ではないだろうか。その代わりに浮き彫りとなるのは、登場人物の間で一瞬だけ浮上するような応対である。あまりに瞬間的なやり取りであるために、新自由主義的体制に組み込まれる暇もなく、すぐに解体されるような関係性——普段の生活上では前景化され難く、誰の意識にもものぼりにくい関係性に潜在する希望が、本作ではスピリチュアルな題材によつて表現されている。

#### 四、「マシーター」とは異なる筋道

本作の表題にも使用されている「ウィッカーマン」とは、古代ケルトの儀式で用いられる人型の構造物である。だが、本作の「ウィッカーマン」は「サイガサマ」という名で、日本の一地域に根付く信仰として設定されている。このことを踏まえるならば、日本社会における人身御供の歴史性を参照する必要も出てくるだろう。六車由美は、次のように述べている。

(略) イケニ工儀礼では、本来、イケニ工を暴力的に殺害することで神を再現させ、それを喰うことで神との一体性が実感されていた。だが、四足獣から二足へ、魚へ、そして殺物へと二工が次々と暴力性の稀薄なものへと置き換えられていくと、祭の

場で神と人との一体性を身体感覚として経験することは難しくなる。人身御供譚は、喰われることで神と一体化する原初的な神と人との関係を語ることで、祭のなかに、神と一体化する身体感覚を呼び起こしているのである。／日本の農耕社会は、生き物を自らが殺す、という行為をできるだけ排除することで発展してきた。それは、殺生による暴力を振るわないですむと同時に、動物と対峙することによって必然的に晒される身の危険、すなわち自らが殺されてしまうかもしれない、という人間が自然から受ける暴力を免れることもある。しかし、人間が生きていくことは、生き物の犠牲の上になり立っているのであり、そこでは人間もまた喰われることで生き物に生を与える存在であるはずだ。人々は、暴力を排除しようとする一方で、稀薄化した生の実感をもう一度身体に呼び覚ましたいと願う。だからこそ、人が神に喰われるという恐ろしい人身御供譚が長い間伝承され続けてきたのではないか、私はそう考えている。

(24)

日本の農耕社会における人身御供譚に、「動物を殺す／動物に殺される」、「喰う／喰われる」という暴力性を喚起する効果があったという六車の論を前提とする時、「サイガサマのウィッカーマン」の考察はより具体性を増していく。本作のサイガサマは、まさに願った者の身体の一部を奪って「喰って」いるからだ。

津村記久子のデビュー作であり、第二回太宰治賞受賞作でもある『君は永遠にそいつらより若い』（筑摩書房、二〇〇五年一月）は、投稿時の題名は「マンイーター」と名付けられていた。直訳す

れば、「人間を喰らうもの」となる。元々の題が意味していたように、弱者に対して向けられた暴力性を、人間の尊厳を喰らい、奪い尽くすものとして辿り直す物語を、津村は作家活動の起点より書き続けてきた。

それに比較するならば、本作は暴力性の薄い穏やかな物語として構成されているとも読めるだろう。しかしこのことは、「喰う／喰われる」関係性を、「マンイーター」（『君は永遠にそいつらより若い』）とは異なる形で表現しているという解釈も可能である。すなわち、対立・敵対する者同士に限らず、「喰う／喰われる」という暴力的な関係性は、一見良好な関係の中にも埋め込まれている。その原理的な「ままならなさ」をどのように引き受けていくかという問いが、本作では実践されているのではないだろうか。(25)

ただし「喰う／喰われる」関係性とは、極端な形で表れるわけではない。具体的には、赤ん坊が母親の母乳を飲むという行為も、「喰う／喰われる」類型の一つと呼べるだろう。そのように考えると、様々な行為や状況設定がこの文脈に引き付けられていく。

本作に関する鴻巣友季子との合評において市川真人は、世代をまたいだ身体「取る／取られる」関係性を、物語で説明されなかった部分に読み込んでいく。それは、ヤシロの元恋人が実はシゲルの父親であったのではないか、という推測である。

つまり、巫女であるヤシロ自身には、身体の一部のように愛した恋人を奪われた——言わばサイガサマに持つていかれた——過去がある。そこから十数年を経て、その恋人が別の女との間に作った子ども（シゲル）を、失った身体（恋人）の

代わりにサイガサマ経由で取り返そうとしている……：……：そういう話と読んで読むと、表面的な物語の外側に「時代をまたいでの交換」というもう一層の怖いレイヤーができません。言わば、アニメズミックな怨念の輪廻が作品の背景に描かれているのではないか、そう読んで読むとすく面白いです。<sup>(27)</sup>

こうした解釈は一つの可能性としてあり得るべきだが、しかし本論の趣旨とは方向を異にしている。市川はヤシロの相手をシゲルの父親と推測するが、そこには不可視化された前提が潜んでいないだろうか。本作でヤシロは、次のように説明していたことを思い出したい。

父親は去年癌で亡くなった。おまえはよ結婚せえよ、どうすんねん次の宮司、と言が残して。／「結婚せえへんのですか？」

／「どやろ、好きな人が他の人としてもうたからなあ」(二四二頁)

ここではただ、「好きな人」と述べられているだけであり、ヤシロのセクシュアリティを男性に限定できるだけの根拠は記されていない。たとえば「好きな人が他の人と結婚した」という条件を純粹に捉えるのであれば、ヤシロの好きだった相手とは、サキコであってもいいはずなのである。ヤシロの願いがサキコの子供の心臓を動かし、そして代理の申告物を入れたという展開に重心を置いた時、子供の出産にはサキコ、ヤシロ、シゲルの三人が関与している。すると、この三人の働きが組み合わさることによって、新たな身体

が誕生したという解釈も同時に物語より導かなければ、「喰う／喰われる」関係性は現在の社会におけるヘテロセクシズムの基盤を再生産するに過ぎない。ヤシロが結果的に失った身体の部分Ⅱサイガサマに喰われた部分は、左手の薬指である。ヤシロ本人が笑い話として「ますます結婚でけんやんかよ」と感想を述べているが、この挿話を一瞥するのではなく、一般的に想定される異性愛主義的な結婚や家族とは異なるあり方が象徴的に記された箇所と読解できる可能性は、常に残されている。

このように、サイガサマとの「喰う／喰われる」暴力的な関係性は、異性愛主義とは異なるレイヤーとして、新たな身体性を呼び込む契機ともなる。それは、津村記久子という作家を考える上で、本作が「マンイーター」(『君は永遠にそいつらより若い』)とは別の道筋を派生させた物語を意味することに他ならない。

## 五、完結しない身体性

本作では、ある動作が登場人物の間でひつそりと移り、伝わっていくような描写が存在する。

弟が、籠に向かって右手をゆつくり挙げた。生きている誰かにさよならを告げるように。(二五一頁)

サイガサマの祭りのクライマックスにおいて、燃やされる人型の籠(ウィッカーマン)に向けてシゲルの弟はこのように手を挙げてみせる。弟の取ったポーズは、去年の籠が取っていた「天に片手を掲げ

るポーズ」と似たような姿勢となつてゐる。シゲルはその姿を見て、何も言えなくなる。弟が「誰か」に向かつて挨拶をしているということ、その身体の切実なまでの動きに対する敬意すら窺えるこの場面には、もはや物語の冒頭で弟に苛立つていたシゲルは存在していない。

この「片手を掲げるポーズ」は、さらに伝播していく。祭りが終わり、しばらくの時間が経過した後、学校に遅れそうになつてゐるシゲルは、自転車で全力疾走をする。その時、回復した父親と一緒にいるセキツカとすれ違ふ。

肩越しに振り返るシゲルに向かつて、セキツカは軽く手を挙げた。笑つてゐた。スピードに乗つてゐたシゲルは、何も声を掛けられないまま商店街を抜け、自転車を駐輪場に放り出すように停車して、妙に浮き足立つた心地で駅の階段を上つていった。(一五九頁)

去年の籠から弟へ、弟からセキツカへ、手を挙げる動作は異なる身体へ次々と移り変わつていく。しかし、急いでいたシゲルはセキツカの挨拶に対して何もできないまま、通り過ぎてしまう。この不完全なコミュニケーションションが最後に配置されることは、何を意味するのだろうか。本論では、最先端のロボット工学研究による知見と交錯させたい。

知人からの「おはよう」という挨拶を無視して通り過ぎるの  
は容易なことではない。その語りかけに対して、思わず応答責

任を感じてしまう。／語りかけに対して私たちが無意識に応答責任を感じてしまうのはなぜだろうか。その発話が「誰かの支えを予定しつつ繰り出されたこと」を自分の身体を介して知つているためである。つまり、同じ「不定さ」を備えているという点で、他者の身体が私の身体から共同性を引き出している。こうした拮抗した関係性が一つの「場」を生み出している。／

では、ロボットたちが「オハヨウ」と言いつつ、こちらに近づいてきたらどうか。その挨拶に対して、私たちはまだ応答責任を感じることはないかと思う。(略)／なぜ応答責任を感じないのかといえば、その発話が「私たちを本当には必要としないから」ではないだろうか。／それらの発話はあらかじめ作り込まれたものであり、系の中に閉じている、あるいは自己完結している。だからその発話は、私たちを必要とするものでも、私たちの存在を予定したものでもないのだ。<sup>88)</sup>

結末において、シゲルはセキツカの挨拶に応じ損ねている。手を挙げる挨拶は、一人では完結しない。それは、相手がいることよつて成立する身体性であり、その場限りではあるけれども、まさしく一つの共同性を生み出す機会となるものと言えよう。このように、本作ではスピリチュアルな表象を介在させることで、自己完結しない身体の可能性への到達が目指されているのである。

しかし第三章でも述べたように、「無力」や「弱さ」によつて一瞬だけ浮かび上がる、このような身体を伴つた関係性に、強大な力への対抗手段としての有効性を認め難いのは事実である。こうした保留を挟むのは、本論冒頭で予告した通り、本作には東日本大

震災”以後の刻印が僅かに含まれているからである。それは、妊娠中のサキコに出会ったシゲルの、以下のような素朴な問いとして提示されている。

「やっぱり、怖かったですか、放射能とか？」／なぜ産婦人科を訪ねたのか不思議がられた十七歳の男の、聞きかじりの知識で控えめにそう問うと、そうやね、とサキコさんはあっさりうなずいた。／「とにかく今は、出産中に地震がないことを祈るわ」／小柄で痩せ型のサキコさんのおなかを見ては目を逸らすということを繰り返しながら、シゲルは、なんとなくやけど、サイガサマには地震をなんとかしたりするレベルの力はなさそうですね、と嫌みを言ってみる。実際ないと思う。あれば弟は学校に行くだろうし、父親は不倫もしないだろうし、母親はさつさとパートに出られるようになるだろう。セキヅカの父親も、昏睡状態のまま何年も起きないなどということにはならないだろう。(一一三頁)

本作で震災および「放射能」の話題が出てくるのはこの場面に限られており、作中の時間軸が「震災後」であるという設定が物語に関連するということも見られない。一見するとこの対話は、プロットの展開上、不要な設定であるとすら捉えられかねないだろう。

だが、木村朗子が述べているように、「震災後文学」というのは、震災後に震災を扱って書かれたものだけをさすのではなくて、震災後の文学状況全体をさす<sup>(29)</sup>と考える時、この箇所には新たな解釈の可能性が芽生えてくる。「放射能」の影響をはじめとした「生の

危うさ」に晒されている人々は、何も「震災後」から突如として現れたわけではない。木村が戦後の「原爆文学」から現在のマイノリティを描いた文学までを、継続的な事態として丹念に分析していることから明らかであるが、「震災」という出来事はそうした「生の危うさ」が継続されている事実そのものを、多くの人々に突き付ける効果を備えている<sup>(30)</sup>。すなわち、不可視の状態に置かれている他者へ向けた視線の変化——現実と虚構双方に対する「読みが変わった」<sup>(31)</sup>のである。

すると「サイガサマのウィッカーマン」における「放射能」をめぐる短い対話は、「震災前／震災後」といった区分を強調するよりはむしろ、様々な人々が抱える「生の危うさ」が、常に存在していたということ、そして現在も存在し続けているという、世界に対するひと続きの見方を表明するものではないだろうか。この箇所を作劇において「不要」と軽率にも判断する／できる態度にこそ、問題は含まれているに違いない。

繰り返しとなるが、津村記久子が描いてみせる人々の瞬発的な接触や交差について、それが強大な力に対する実効性を持つかどうかは疑わしい。しかし、その「無力」である事実への醒めた自覚が、時に「無力」を超え得るところに本作の希望はある。本当は誰しもの背後へ常に控えている脅威、それに対する「無力」の自覚とは、人間中心主義的な観点<sup>(32)</sup>によって世界を統御できると思い込める傲慢な思考の問い直しとも接続されていくものだろう。以上のように、その場限りの、完結しない身体性を肯定的に評価する領域として、津村記久子の文学は記されている。

- 1 初出は『デジタル野生時代』二〇一二年三月〜四月号。後に単行本『これからお祈りにいきます』（角川書店、二〇一三年六月）、文庫本『これからお祈りにいきます』（角川文庫、二〇一七年一月）に収録された。本論で用いる文章は、文庫本収録のものに依拠する。
- 2 これについて、津村は「自分としては初めてのファンタジーのつもり」と応答している（柏崎敏「祈らずに いられない姿描く」、『朝日新聞』二〇一三年七月九日夕刊）。
- 3 なお、タイトルにある「ウィッカーマン」とは古代ガリアのドルイド教で、人型の檻の中に犠牲となる人間や動物を閉じ込めてそのまま焼き殺す祭儀のことである。
- 4 佐藤洋二郎「神社に頼る若者らを描く」（『東京新聞』二〇一三年八月一日朝刊）。
- 5 ただし、本作では既存の親密性である「家族」自体も全面的な否定は為されていないことには、注意を要したい。
- 6 樫尾直樹『スピリチュアリティ革命——現代霊性文化と開かれた宗教の可能性』春秋社、二〇一〇年三月、一九二—二〇頁。
- 7 島蘭進『スピリチュアリティの興隆——新霊性文化とその周辺』岩波書店、二〇〇七年一月、七九—八二頁。
- 8 桜井義秀「はじめに」（桜井義秀編『カルトとスピリチュアリティ——現代日本における「救い」と「癒し」のゆくえ——』ミネルヴァ書房、二〇〇九年一月、iii—iv頁）。
- 9 リゼット・ゲールパルト著、深澤英隆、飛鳥井雅友訳『現代日本のスピリチュアリティ——文学・思想にみる新霊性文化』岩波書店、二〇一三年一月、三二二—三三三頁。
- 10 伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティ 現代人の宗教意識の社会的探求』溪水社、二〇〇三年三月、ii—iii頁。
- 11 なお、本論および脚注で扱ったもの以外で本作に関する主な書評としては、滝口悠生「誰もが「誰か」とどつての「誰か」である」（『群像』第六八巻第一〇号、二〇一三年一〇月）、西加奈子「怖いくらい津村作品が好き」（『毎日新聞』二〇一三年一月二六日夕刊）がある。
- 12 池田雄一「願いと祈りと走馬燈」（『新潮』第一一〇巻第一〇号、二〇一三年一〇月、三三四—三三五頁）。
- 13 宮部みゆき、津村記久子「理不尽な世界と人間のために」（『新潮』第一一四巻第五号、二〇一七年五月、一二三—一二四頁）。
- 14 津村記久子、千早茜「対談 これからお祈りにいきます」（『本の旅人』第一九巻第七号、二〇一三年六月、一七頁）。
- 15 高橋源一郎、辻信一「弱さの思想 たそがれを抱きしめる」大月書店、二〇一四年二月、二〇三—二〇四頁。
- 16 鷺田清一『〈弱さ〉のちから ホスピタブルな光景』講談社学術文庫、二〇一四年一月、二二二頁。
- 17 オウエン・ジョーンズ著、依田卓巳訳『チャヴ 弱者を敵視する社会』海と月社、二〇一七年七月、一七—一八頁。
- 18 伊藤雅之「社会に拡がるスピリチュアリティ文化——対抗文化から主流文化へ」（張江洋直、大谷栄一編『ソシオロジカル・スタディーズ——現代日本社会を分析する』世界思想社、二〇〇七年一二月、二二九頁）。
- 19 黒岩裕市「ゲイの可視化を読む——現代文学に描かれる（性の多様性）？——」（晃洋書房、二〇一六年一〇月）では、「世界に一つだけ

の花」を新自由主義の文脈に置いた上で、次のように分析している。「確かに、自己否定に苛まれた時に、この曲に救われることはあるだろう。

しかし、「どれもみんなきれいだね」や「もともと特別なOnly One」と、すべての「花」＝「人」がそのまま肯定されるということは、たとえ二番の歌詞に出てくるような「色とりどりの花束」には選ばれなかつたとしても、「バケツの中誇らしげに　ちゃんと胸を張って、その苦ししい現状に満足せよというメッセージに容易に転化してしまうものでもある。／さらに、この曲は「それなのに僕ら人間は　どうしてこゝも比べたがる？」というように、他者との比較による順番＝「NO. 1」ではなく、自分自身に価値が内在していること＝「Only One」を称えるものだが、その前提にあるのは「一生懸命になればいい」の「一生懸命」や「頑張つて咲いた」というフレーズに表れている努力や頑張りの絶対視である。(略) そうした意味で、一見すると生存競争から逃れ、「いろんな花」の共存を称賛するような「世界に一つだけの花」からは、自助努力や自己責任を重視するネオリベラルな価値観が透けて見えるのである」(一一六頁)。

20 稲垣栄洋『弱者の戦略』新潮社、二〇一四年六月、七四頁。

21 津村記久子「解説」(保坂渉、池谷孝司『子どもの貧困連鎖』新潮文庫、二〇一五年六月)。

22 安藤泰至「スピリチュアリティ」概念の再考——スピリチュアリティは霊的世界観を前提とするか?——」(『死生学年報』第四巻、リト)、二〇〇八年三月、一九頁。

23 具体例としては、拙稿「暴力からの脱出／他者への接近——津村記久子「地下鉄の叙事詩」論——」(『日本文学』第六三巻第九号、二〇一四年九月)を参照されたい。

24 六車由美『神、人を喰う　人身御供の民族学』新曜社、二〇〇三年三月、二二〇頁。

25 英語圏において、man-eaterは、虎やライオン、熊、ワニなどの大型肉食獣を指す言葉として一般的に用いられている。また、俗語的な意味としては、「男を弄ぶ女」というものもあるのだが、津村の執筆した「マニーター」の物語では、そうした女性蔑視的なジェンダー観の伴った言葉とはまるで逆の意味が提示されていることは強く指摘しておきたい。

26 そうした意味において、本作は最初から最後まで食事をするシーンが非常に多く描かれることは特筆すべき点だろう。

27 鴻巣友季子、市川真人「(文芸季評) 鴻巣友季子と市川真人の「国境なき文学団」 第十一回」(『文藝』第五二巻第四号、二〇一三年一月、三六四頁)。

28 岡田美智男『弱いロボット』医学書院、二〇一二年九月、九四・九五頁。

29 木村朗子『その後の震災後文学論』青土社、二〇一八年二月、二六頁。

30 本論における木村朗子『その後の震災後文学論』の内容理解については、拙稿「断絶と継続の基準を塗り替えること」(『図書新聞』武久出版、三三四七号、二〇一八年四月一四日)もあわせて参照されたい。

31 木村朗子、前掲、四〇頁。

32 これに関する先行研究に、芳賀浩一『ポスト(3・11) 小説論——遅い暴力に抗する人新世の思想』(二〇一八年六月、水声社)が存在する。芳賀は、環境批評および「人新世」の概念を踏まえ、「良質の「ポスト(3・11) 小説」は、多くの作者がおそらく意図していない



にもかかわらず、なんらかの形で「環境」の問題を取り入れ、人間同士の加害と被害に限定されない、より複雑で開かれた関係を描いている。東日本震災後の小説は、惨事の衝撃を前に「作家に何が出来るか」を模索する過程で人間中心主義の限界にぶつかり、さまざまな形で非人間の作用主体性（エージェンシー）を表現することを試み、近代の想定を超えた新たな関係性に形を与えようとしているのである」（二四―二五頁）と述べている。本論が進めてきた考察は、ここで問われている「環境」の内実を、自然や土地に根差したスピリチュアルな表象と重ね合わせたものとも言えるだろう。

## 付記

本文中の引用における「／」は改行を意味する。引用文献はすべて初版を用いた。なお本論は、日本近代文学会二〇一七年度秋季大会（二〇一七年一〇月一五日）におけるパネル発表「『他者』と共同性——戦後日本のスピリチュアリテイ表象——」での発表内容に、加筆訂正を施したものである。会場で貴重なご意見を頂いたことを、感謝申し上げます。